令和７年度　長崎大学教育学部附属小学校　学校だより

「らしさ」輝く附属小

第３号　令和７年　４月２５日（金）　校長　森内　秀学

文化の継承

附属小には、「一致団結してやり遂げることを大切にする」という文化があります。一般には、行事の精選とともに、それを培う場すらなくなりつつありますが…。上は、その文化を継承している行事の一つ「色別結団式（4／23（水））」の様子。１～6 年生と担当教員が色別に分かれ、優勝を目指す思いを高め合うという、魂が震えるような 1 時間です。

文化は、守ろうとするだけでは衰退しますが、変化を受け入れ、創造性を尊重することで、より豊かに発展していきます。以前より迫力が増した色別結団式を見ながら、附属小は上手に文化を継承しているな、と思いました。運動会本番は５／18（日）。お楽しみに！

「してもらったように」しています

１６日から始まった、１年生の給食指導。教えてくれるのは、頼りになる６年生の子どもたちです。大きな給食着の着方やたたみ方（左）、つぎ分けのコツや分量まで（下）、細かく教えていました。

私は１年生の担任に、「６年生はどうしてこんなに上手に教えるんだろうね。」と尋ねました。すると、１年生の担任は、「自分がしてもらったようにやっているみたいですよ。

丁寧に教えてもらった子ほど、丁寧に教えています。」と答えました。言われたようにするのではなく、してもらったようにする…。パートナー活動って恩送りですね。

教師も学んでいます

附属小の重要な使命の一つが先進的な授業研究であることはご存じのとおりです。早速、4／21（月）は、板山先生と林先生が、教科も毛色も違う授業を公開し、それを基にみんなで学び合いました（上）。途切れることなく協議をする様子を見ながら、（この姿勢があるから授業が上手になっていくのだな）と嬉しくなりました。校長冥利に尽きますね。

↓今年度も月末は２枚目におなじみのメンバーが記事を書きます。ぜひご覧ください。↓

北斗の学校「らしさ」

学校全体で育ちを支える取組「スタートカリキュラム」を中心とした、１年生の学びが始まりました。４月は、毎朝学年で集まる「ワクワクタイム」で、学校のきまりを確認したり、歌を歌ったりします。日替わりで職員がゲストとしてやってくる「先生となかよし」では、子どもに早く名前を覚えてもらえるように自己紹介にも力が入ります。私も自己紹介した日には、たくさんの１年生に声を掛けてもらいました。

不安が解消され、どういう振る舞いが適切なのかを学び、友達ができることによって、はじめて学校は居心地の良い場所になったと言えます。次は、２年生、６年生のパートナーと出会い、学校探検に出発します。

それぞれのスタート

同時に「附属の全ては６年生から学ぶ『６年学習』」が始まり、リーダーとしての１年間の学びがスタートしました。毎朝の朝掃除、１年生のサポート、スマイルチーム活動に運動会準備と大忙しです。下校の際、６年生に「リーダーの暮らしはどう？」と聞いてみると「思っていた以上に大変だけど、楽しい。」と笑顔で答えてくれました。自覚が芽生え、少し大人になった６年生の姿が嬉しいです。旅人の道標となる北斗星に肖った北斗の子。下級生の憧れとなることは容易ではありません。１年生同様に６年担任だけでなく、全職員で育てていきます。

学校は小さな社会です。この社会の中で発達段階に応じて育まれた習慣や考え方、心が子どもの将来に繋がることを全職員で自覚し、「北斗の魂百まで」の気概で本年度も臨んで参ります。

教頭　橋田　晶拓

教えから学びへ³

アンラーン

今週の月曜日、2年1組　板山教諭による国語科授業、4年3組　林教諭による算数科授業を全職員で参観しました。学び方の指導や、子ども自らが学習の進度を決める学習形態の提案を行ったものです。放課後には、それぞれが見取った子どもの学びの姿を持ち寄りながら、明日の授業改善に生かしていくための視点を協議しました。

表題「アンラーン」とは、新しい変化に対応するために、固定化した思考や習慣を解きほぐし、一から学び直していくこと。文部科学省　文化庁次長　合田　哲雄　氏は次のように述べています。

「アンラーン」に求められるのは、立場や年齢を超えて、互いが対等であるという感覚です。

授業提案や協議会においても、教員歴や年齢に関わらず、「どこまで学習規律を重んじるか」「何のための自由進度学習か」といった自身の教育観を見つめ直すような活発な意見交換がなされました。

また、私たち教員という仕事は、職員同士だけではなく、子どもからも学ぶことがばかりです。だからこそ、子どもをとことん鍛え、信じ抜き、委ねていく自律した学びが実現されていくのだと感じます。「若手だから」「子どもだから」と制限されることがなく、挑戦を楽しめることが、「『らしさ』輝く附属小」の強みです。

主幹教諭　松尾　勇哉

背伸び

子どもたちの頑張る姿を

ある日の昼休み、6年生が教室で運動会の団旗を作成していました。結団式の準備をしたり、応援の内容を考えたりと、6年生は最高学年としての役割に大忙しです。それでも、その役割を果たそうと必死に取り組んでいる6年生の姿からは、この一か月ですでに頼もしさが感じられるようになっています。

学校では、毎日のようにチャレンジの機会が訪れます。特にこの4月は、新しいことへのチャレンジの連続です。入学したばかりの1年生も、次から次へと、新たなチャレンジを求められる日々ですが、自分の力で乗り越えようと必死に頑張っています。そして、着実にできることが増えてきています。

学校は楽しいところだけど、
楽をするところではない。

チャレンジの機会に溢れる学校で、必死に背伸びをするように、自分を伸ばそうと頑張る子どもたちの姿を切り取って、このコーナーでは紹介していきます。

教務主任　野口　拓也